

災害と社会

名古屋大学 名誉教授

田中 重好

報告の構成

1) 前回の報告

1. 「阪神淡路大震災研究の失敗」を繰り返してはならない
2. 思想的な総括がなされていない

2) 失敗を繰り返さないために、何が必要か

1. 災害研究の累積的發展をめざす
災害と災害とのインターバルが長いために、累積的發展が困難
2. 災害社会学の体系化を進めること
災害社会学の体系のなかに、個々の調査研究成果を位置づけることが必要

今回の報告は、この体系化に向けての一つの提案

前回の報告

「社会学を中心とした東日本大震災に関する調査研究のプラットフォームの構築の必要性」

「大震災を研究し続けてきた社会学者を中心とした開放型プラットフォームを設け、研究交流・討論、社会学以外の分野の研究者・政策担当者・市民との交流を促進する必要がある」

こうしたことが何故必要かといえば

1. 「阪神淡路大震災研究の失敗」を繰り返してはならない

研究成果が分散、総括が不十分だった

その背景には、**災害の社会学的研究のための体系化に向けた努力がなされなかった**

2. 思想的な総括がなされていない

清水幾太郎が、1755年のリスボン大地震について議論した後、「関東大震災は、終にヴォルテールを持たなかった」という発言、西欧ではこの大地震をキッカケとした(だけではないが)世界観の転換につながった

今回は「災害と社会」の体系化に向けての提案

災害研究の特殊性

文理にまたがる「**総合科学**」的な性格 その総合科学の中の社会学の立ち位置？
低頻度の発生という特殊性

- 1 体系化が必要だ
- 2 ハザードからディザスターへの転換： その転換過程に介在する脆弱性概念
 - 2.1 両概念の峻別
 - 2.2 転換過程、 その介在する社会的コンテキストと社会的対応
- 3 脆弱性 (Vulnerability)、回復力 (Resilience)
- 4 被災体験を社会が学習してきた／「社会に埋め込む」／再帰性
- 5 災害研究の広がり 社会への注目、さらに、非意図的な次元への注目が必要だ

1 体系化が必要だ

例えば

阪神淡路大震災のボランティア研究の成果が東日本大震災の調査にどう生かされたのか
阪神淡路大震災での広域避難研究が東日本大震災の調査にどう生かされたのか

災害の社会学的研究の現状と課題

- 1) 研究の歴史の浅さ
- 2) 災害の個性・個別性から生ずる問題
災害ごとの個別的な研究に終わってしまう、研究の蓄積が難しい
- 3) 防災研究に偏りがち
- 4) 理論化への志向が弱い 個別的な研究が「災害社会学全体に位置づけられない」

2 ハザードからディザスターへの転換

- 2.1 ハザードからディザスター 両概念の峻別
- 2.2 転換過程

2.1 ハザードとディザスター、両概念の峻別

ハザードは自然科学的な現象であり、地震とその物理的被害については、力学的に説明できる。ディザスターは人間的、社会的現象である。

それは、同じ物的被害(たとえば、道路の破壊)をとってみても、その崩壊した物がどういった社会的機能を担っているのかによって、社会的意味は異なる(道路の破壊についていえば、その道路が同じ物理的構造物であっても、幹線交通路なのかどうかによって、社会的影響は異なる)。

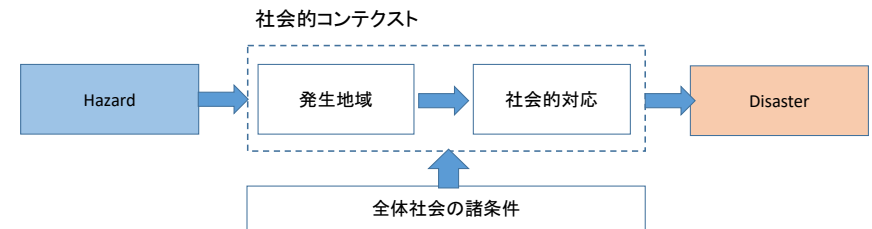
また、同じハザードに襲われた地域であっても、仔細に見てゆくと、ディザスターの様相が異なることは少なくない。

まして、国が違えば、同じ震度の地震に襲われた場合でも、建造物の被害程度や人的被害の程度が大きく異なる

B.ワイズナー 「ハザード×脆弱性=災害(あるいは、リスク)」と定式化

2.2 転換過程

• この転換過程をどうモデル化できるか



ハザードからディザスターへ

ハザードとディザスターとの関連

- 1) ハザードが異なっても、ディザスターの様相は同じ
- 2) ハザードが同じでも、ディザスターの様相が異なる

二つの要因によって、ディザスターの様相が決まる

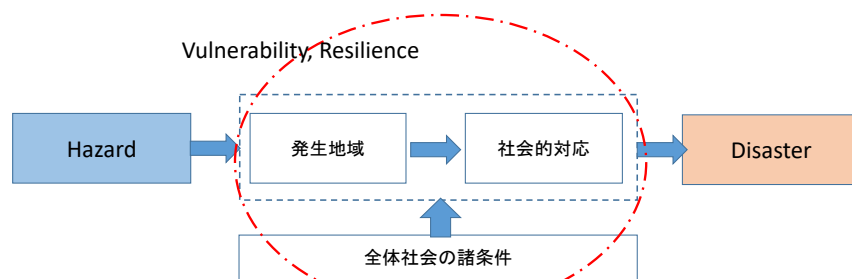
- 1) **どういった社会**にハザードが襲ったのか
⇒ これまで、Exposureの問題として議論されてきた
- 2) それに**どう対応した**のか(予め、どう対応の準備をしていたのか)
⇒ これまで、Mitigationの問題として議論されてきた

「災害」(災害の様相)をどのレベルで捉えるか 被説明変数の設定

	行為	関係	集団	制度
個人				
家族				
小コミュニティ				
中コミュニティ				
地方政府				
広域地域社会				
政府				
全体社会				

災害の全体像と、各レベルでの研究
個々の**研究成果の位置づけ**をするための座標軸を用意する必要性

3 脆弱性 (Vulnerability)、回復力 (Resilience)



脆弱性 (Vulnerability)、回復力 (Resilience) は、この部分を別の角度から議論するための概念

4 被災体験を社会が学習してきた／「社会に埋め込む」／再帰性

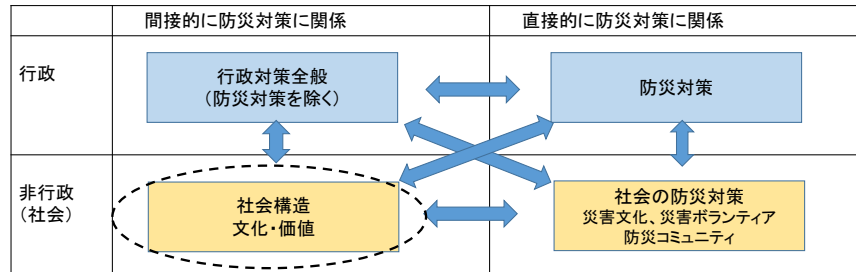
どの社会も、これまで数多くの災害を経験し、その被災の経験のなかから、様々なことを学び、社会を作り変えてきた。そのことを、「社会は被災経験を内部化してきた」とも、「社会は被災経験を自らのうちに埋め込んできた」とも、言い換えることができる。

しかし、いつも「内部化」が成功するわけではない
内部化の成功要因、失敗要因は何か

そのことを、社会学では「再帰性」として議論している。
特に、近代社会において再帰性が重要となってきたのは、近代社会は「過去の経験」だけでなく、「将来のリスク」をも再帰的に対処するようになった。
災害に限定して言えば、将来発生が予想される災害への備えの問題。

埋め込む主体としては、行政と非行政の二つの主体を指定することができる

5 災害研究の広がり
社会への注目、さらに、非意図的な次元への注目が必要だ



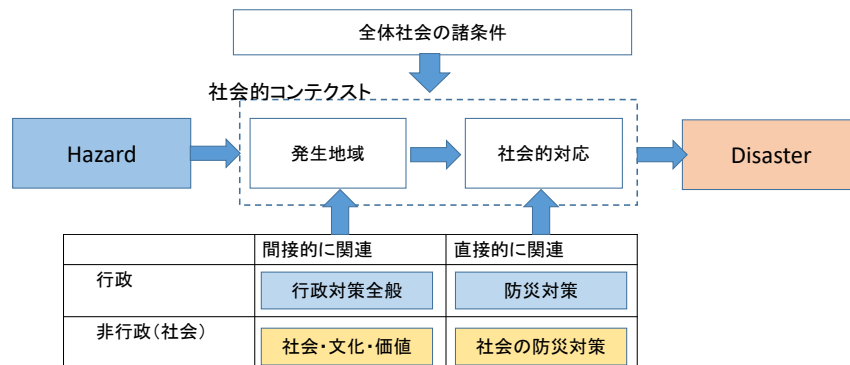
災害研究における社会学の課題

社会学が、災害研究全体のなかで果たすべき役割・課題

行政領域ではなく社会領域へ着目することが必要だ

さらに、社会領域でも、直接的関係領域ではなく、間接的関係領域へ着目することが必要だ
なぜならば、実際に、災害の様相を規定するのは、この領域の要因が重要

全体として



防災とは、ハザードの発生をディザスターにつなげない、ハザードが発生してもディザスターにならないようにすること
その意味で、防災とはMitigation

防災への貢献 政策科学としての災害研究

ハードな防災対策に偏向しがちな従来の対策の問題点や、「官」主導の防災対策の問題点を指摘し、「住民の目線」から防災対策の在り方を提言する。
「社会的制御」(船橋晴俊)の発想の導入

災害研究の蓄積

個別の災害研究の比較研究
災害の個性性を克服する方途

社会学への貢献 社会学の基礎としての災害研究

災害社会学の知見から、社会学全体への貢献
災害という「非日常的な状況」のなかでしか観察できない社会現象から、「普段見えない」どういった「真実」がわかるのか

